

J-Pop をめぐるクロスオーバー現象とその周辺の事象について
——クラシック、伝統邦楽、ミュージカルとの関係を中心に——

増山 賢治

はじめに

大学と言っても芸術大学（音楽学部）という演奏実技中心の特殊な教育環境の下、筆者は「ポピュラー音楽概論」の講義を担当している。それは隔年開講を原則として 2008 年度後期からスタートした新設科目なので「教授経験が浅い」という括弧付きではあるが、前回および今回の受講学生の提出レポートや講義中での学生に向けての質問への反応を総合すると、彼らの大半は大学入学前からクラシック音楽の演奏以外には興味関心（とりわけ理論的アプローチ）が薄く、そしてその根底には「ポピュラー音楽観賞＝遊び」という意識があるように思われる。すなわち、J-Pop を含めた世界のポピュラー音楽について「一見知っているようで実はあまり知らない」という状況や「音楽周辺の諸芸術にはそもそも目もくれない」という芸大（音楽）生の慢性疾患ともいべき現象は、ある程度予想されたこととは言え、筆者がポピュラー音楽研究の専門家ではないことと相まって、ポピュラー音楽を教えるのは意外に難しいことを痛感している¹。そのようにポピュラー音楽を正面切って理論的、学究的にアプローチする講義内容を設定することが困難な状況にある以上、筆者は以下のような手法を教育内容充実化の当面の対応策としている。すなわち、精選した視聴覚資料のデモンストレーションを通じて日本の音楽文化を構成する 1 つの「現象」として J-Pop のミュージシャンの活動や作品をとらえ、その音楽作り、演奏のプロ意識を受講生が学び取り、現代日本の音楽文化がいかに活発に動いているかを会得し、そこから日本のクラシック音楽の位置づけやプロの音楽家を目指す者として個々の立ち位置を彼ら受講生が考えることを触発できるような実例を多く提示することを旨としている。そうした経緯もあって、本稿はポピュラー音楽研究の一構想というより、教育実践から得た経験をもとに、教材研究の面でも有用な意義を見いだせそうな実例を提示する試みという側面をより強く打ち出している。換言すれば、J-Pop と他ジャンルの音楽芸能をめぐる「人」（ミュージシャン、演劇人など）と「もの」（音楽芸能の諸ジャンル、楽曲など）の様々な動き（交流、混淆、移動など）の中から、1 つの「商業戦略」としてのクロスオーバー現象とその周辺の事象に焦点を当て、J-Pop と伝統邦楽、クラシック、そして演劇（ミュージカルを中心に）との関わり方の諸相をとらえる試みである。

本稿では J-Pop を、洋楽志向を基本的コンセプトとして 1988 年以降に生まれた日本のポピュラー音楽における新しい潮流として捉え、それに纏わる諸現象を考える視点として、英和辞典等における一般的な定義に基づくクロスオーバーとその周辺の事象を説明するためのいくつかの関連語を以下のように用いる。

*クロスオーバー（crossover）：音楽・服飾の分野においてジャンルの混淆によってできた新形態の音楽・ファッションで、1 つの明確な方向性を以て恒久性を有し、今までにない 1 つのジャ

ジャンルとしての性格をもつ用語。すなわち、新しいジャンルを形成する指向性が明確に存在し、かつ継続性が認められるもの。

*コラボレーション (collaboration) : 合作、共同制作 (品)。音楽以外にも使用し、ある程度の方向性はあるが、恒久性はあまりなく、ジャンルを確立するとは限らないもの。

*フュージョン (fusion) : 主にジャズとロックなど他の音楽形式との混合で、明確な方向性に乏しく、ある大ジャンルの小ジャンル (一変形) ととらえられるもの。

*トランスバウンダリー (trans-boundary) : 越境。本稿では音楽および関連諸芸術のジャンルを越えていくことを指す。

*ハイブリッド (hybrid) : 混成物。ジャンルや様式の異なるものを混ぜ合わせること。

1 伝統邦楽と J-Pop—伝統邦楽のニューウェーブ

まず、一見 J-Pop との距離が遠いと考えられそうな伝統邦楽との絡み、接点が見られる好例を挙げよう。一般に保守的と思われがちな伝統邦楽の世界だが、西洋音楽とのクロスオーバーまたはそれに纏わる現象として認識される動きは、古くは20世紀初頭の新日本音楽運動にも見られ、近年では EAST CURRENT や古武道らの出現により更なる広がりを見せている。前者は箏曲家のみやざきみえこと尺八奏者の藤原道山によるユニットで、ユニット名をタイトルにしたアルバム CD にはアストル・ピアソラ〈タンゴの歴史 1900〉、ホアキン・ロドリゴ〈アランフェス協奏曲〉、ベーラ・バルトーク〈ルーマニア民族舞曲〉から、みやざきみえこによる創作曲までバラエティに富んだ曲目が収録されている²。後者はチェロの古川展生 (桐朋学園大学卒業、東京都交響楽団首席チェロ奏者)、ピアノの妹尾武 (J-Pop を中心に活動する作曲家・ピアニスト)、尺八の藤原道山 (東京芸術大学音楽学部邦楽科尺八専攻卒業、同大学院修了) によるトリオで、活発な録音および演奏活動を展開している³。

そして、そうした動きが概ね器楽アンサンブルの範囲に止まっている中、ヴォーカルを含めている点で注目されるのが ZAN である。そのユニット名は Zenith and Nadir の略称で、結成当時 (2002年7月) のメンバーは市川慎 (生田流清絃会嫡子=箏・十七絃)、小湊昭尚 (民謡小湊流家元=vocal/尺八)、砂川憲和 (琴古流尺八奏者=尺八・篠笛) で、現在は市川、小湊の二人で活動を展開している⁴。

彼らの音楽的バックグラウンドについて公式 HP などを参考にまとめると、箏・十七絃担当の市川慎 (1975 生まれ) は沢井比川流 (箏曲家沢井忠夫の長男)、沢井一恵に師事。小湊昭尚 (1978 年生まれ) は東京芸術大学音楽学部邦楽科尺八専攻を卒業。師は山口五郎であるから、古武道の藤原道山とは兄弟弟子ということになる。砂川憲和は大阪教育大学芸術音楽コース・フルート専攻を卒業し、1998 年より琴古流尺八を学んだユニークな経歴のミュージシャンであったが、2006 年登山中の事故により死去したことは惜まれる。

彼らがデビュー当初 J-Pop の世界でどのように位置づけられていたかを知るには、いくつかのアルバムに付されているキャッチコピーが参考になる。例えばアルバム《乱》には次のように書

かっている。「J POP に、また新たなアーティスト登場!! 千年以上に渡って受け継がれてきた、古き良き日本の伝統が、斬新な現代の音楽へとみごとに变化した。ハートの奥を優しく包み込んでくれる、日本の伝統和楽器による、この最高のリラクゼーション、是非一度味わってみてください」。

そして、アルバム《風籟》に付されている宣伝用チラシには「(前略)・・・純邦楽界の精鋭3人組。和楽器の音色(=心地よさ)をふんだんに取り入れた、これまでにない究極のポップスを聴かせます。6.30 リリースの EXILE のニューシングル『real world』に収録されている、“EXILE LIVE TOUR 2004”でも話題の楽曲《real world~REPRESENT JAPAN DUB》にフィーチャーされた ZAN! 彼らが“EXILE LIVE TOUR 2004”の7.10、7.11の横浜アリーナ公演に参加が決定!」とある。

ZAN の CD の収録楽曲には声楽曲の占める割合が高く、作詞の大半は ZAN、作曲はそれぞれ個別の作曲家に依っている。例えば、アルバム《風籟》には全6曲中《風籟》《思ふ空》《龍神》《まほろば~子供達のために~》《結》の5曲。アルバム《乱》では全10曲中《Mujiyo~無常~》《Sasbay~颯爽~》《Say hello again》《Do it!》《Stream》《Angel is who?》《As I go》《Hearts》の8曲で、シングル《ZAN 昴》では《昴》《巡る春》のように全2曲が声楽曲である。

それから、砂川憲和の死後、残りのメンバーで制作、リリースした最初のアルバム《絆》には次のような解説が記されている。「悲しみを乗り越え、2人で活動を再開した ZAN。家元・和楽器デュオとしての再出発となるミニアルバム。海を渡りニューヨークでも活動開始。日本から世界へ。彼らの『絆』は活動の場を広げていく」とあり、ここでは全7曲中歌曲は《絆》《花霞》の2曲であるが、付録のDVDにも収録されているPV《絆》(作詞:青山紳一郎、作曲・編曲:TATOO 歌:ZAN)は彼らの姿が映像で見られる目下、公式に発売された唯一のもので、筆者は彼らを紹介する様々な機会に活用している⁵。そこで聴かれる発声は彼らの他の声楽曲と同様、民謡のそれではなく、伴奏を務める尺八や箏も平均律に合わせているせいか、洋楽器と巧く溶け合って総体的に一種独特の音響的一体感を示している。そして、彼らの演奏を細かく聞き込んで行くと、それは尺八、箏共にあくまでも伝統的な演奏テクニックをベースにしている、大胆な楽器改良を施している中国楽器とは異なり、洋楽への単なる迎合ではないことを感じるだろう。

さらに最新のミニアルバム《ZAN Neo Tokyo Lounge》は従来とは異なった方向性を模索するかのような構成内容となっている。その特徴は折り込みチラシに書かれている文章が参考になる。

「日本から世界へ・・・ライブを中心に活動を続けてきた〈和楽器ユニット〉[DJ/クリエイティブ・ディレクター:沖野修也(KYOTO JAZZ MASSIVE)]、[新世代型ダンスミュージックバンド:CRO-MAGNON]、等と手を組み、“和のテイスト”と“洋のサウンド”を融合させ、〈アナログ・ダンサブル・サウンド〉として新しく生まれ変わり、クラブジャズシーンへ新しい風を吹き込む。」と新たな意気込みが示されている。確かに、4曲目(器楽曲)の《Superstition》における尺八の自由リズム風の演奏とミニマルミュージックを思わせるフレーズの反復によるクラブミュージックサウンドとの掛け合い(?)が聞かれ、同アルバム中唯一の声楽が絡んだ5曲目の

《WIDEOPEN》はほぼ意味のない歌詞（単語、フレーズ）を散りばめて構成するなど、それまでの彼らの声楽曲とは明らかに異なる創作スタイルが示されている。尚、全6曲のタイトルは下記のようにすべて英語で記されている。

1. Eternal Flow
2. Come In.....Planet Earth
3. Neo Tokyo Lounge(Interlude)
4. Superstition
5. WIDEOPEN
6. EAST WIND

藤原道山や ZAN に代表されるような伝統邦楽との関係を維持しつつ、新しい音楽世界を求めて他ジャンルとも積極的に関わっていく動きをどのような視点でとらえ解釈すべきか、さらなる観察と分析が必要であるが、現時点で少なくとも伝統邦楽の世界においても様々な音楽ジャンル（伝統邦楽ジャンル相互におけるコラボレーションを含め）とのクロスオーバーによる新しい関係性が進行しており、ニューウェーブと形容するに相応しい様々な興味深い事象が表出していることは確かなようである。ちなみに筆者が様々な場における教学の際に取り上げた例を付け加えれば、津軽三味線の上妻宏光⁶、ROCKの伴奏（音楽創作は宇崎竜童、演奏は宇崎竜童、安岡力也ほか）による興味深い文楽上演（人形は桐竹紋寿、吉田文吾）《文楽人形曾根崎心中 ROCK》（2002年）、ロックバンドのギタリストが津軽三味線の修行をし、コンクールに出場するまでを描いた映画《オーバードライブ》（2004年、柏原収史主演）等がある。その他、世界に発信する日本音楽の今を海外に紹介すべく芸団協のコーディネートにより上海万博で開催された日本音楽のイベント、コンサートを掲載したプログラムからもそれを垣間見ることができる⁷。

2 クラシカルクロスオーバーの動向から

クラシカルクロスオーバーとはクラシック音楽とポピュラー音楽が融合した音楽のことで、アメリカの音楽雑誌『ビルボード』がつけた用語と言われている。ライトクラシックとも称され、器楽声楽ともに含んでいるが、今回は声楽について取り上げる。それは世界的にも1つのジャンルを形成しているもので、著名なミュージシャンとしてイギリスの男声四人組ヴォーカルグループの IL DIVO 等を挙げる事ができる。その方面の日本における先駆者たちで、一世代前のミュージシャンとしては故本田美奈子、現役では増田いずみのソロ活動等が思い起こされるが、近年最も注目すべきコーラスユニットと言えれば ESCOLTA であろう⁸。結成当時（2006年12月5日）のメンバーは、結城安浩（1977年生まれ。J-Popのバックコーラス、サポートミュージシャン、シンガーソングライター）—Pops Voice、吉武大地（1979年生まれ。東京芸術大学音楽学部声楽科およびミラノ音楽院卒業）—Baritone、田代万里夫（1984年生まれ。東京芸術大学音楽学部声楽科卒業）—Tenor、山崎育三郎（1986年生まれ。東京音楽大学声楽演奏家コース中退）—Musical Tenor（それぞれの声のパートの呼称は2007年のメジャーデビューのアルバム《ESCOLTA 愛の流星群》の解説書ほかより借用）。2008年12月に山崎育三郎が脱退し、現在は残りの三人で活動中であるが、2009年から田代万里夫がミュージカル界にも進出して活躍の場をさらに拡大している⁹。

ESCOLTA 結成の仕掛け人は二期会の池田直樹で、その誕生の経緯は公式HPでつぶさに知る

ことができる。ターゲットを 30-50 代の女性としてオーディションによりメンバーを選定したと言われ、その点についてビクターエンタテインメント（株）取締役会長の三枝照夫は講演¹⁰で次のように述べている。

「(前略) 日本のオペラ界の重鎮である池田直樹さん監修のもとで行われたオーディションで選ばれた、男性 4 人組のユニットで、音楽プロデューサーは五木田岳彦さん。ESCOLTA とはスペイン語で、男性が女性に付き合うことです。ターゲットは 30~50 代の女性とあらかじめ想定してあるので、皆さんにはあまり馴染みがないかもしれません。ちなみにこのくらいの購買層は非常に重要です。なぜなら日本の人口の半分以上はすでに 50 代以上の人だからです。(中略)・・・ ESCOLTA は、「韓流」や「○○王子」、「千の風になって」など、ネオクラシックの先頭に立つことが狙いです。そしてポップスだけではなくクラシックやオペラ、ミュージカルなど、高い芸術性も提供できる実力がある。(以下略)」

仕掛け人たちの当初の思惑はさておき、実際に彼らの歌声を聴いてみると、様々なバックグラウンドの作詞家、作曲家による多彩な楽曲を通して声質の異なるメンバーが醸し出す独特の音空間が確かに大きな魅力となっていると感じられるだろう。彼らの音楽がどのようにクロスオーバーしているかをファーストアルバム《愛の流星群》の収録曲に関する楽曲解説（HP のディスコグラフィのコーナーに掲載）を参照すると、その具体的な状況を知ることができる。

例えば、1. 〈月夜の夢〉の【ディレクターズコメント】には次のように書かれている。「POPS によく見られる“Aメロ→Bメロ→サビ→Aメロ→Bメロ→サビ”という構成をとらず、“Aメロ→Bメロ→Cメロ→Dメロ→Eメロ”とメロディーを繰り返さない構成を持つ曲。フォーレの「シチリエンヌ」「夢の後で」という曲がコラージュされています。次から次への展開するメドレー形式で、最終セクションで繰り返されるメロディーに冒頭のイタリア語のメロディーが絡みドラマティックな盛り上がりを見せます。POPS としては珍しい 3 拍子でシンコペーションが多用されており、とても複雑で繊細。・・・(以下略)」

前掲文に記されているコラージュ（貼り合わせ）という手法がこのアルバムの収録曲ではしばしば用いられており、5. 〈Water town〉ではサン・サーンスの〈白鳥〉、6. 〈My son〉では J.S. バッハの〈メヌエット〉、7. 〈ときめきに溺れて〉ではイギリス民謡〈グリーンスリーブス〉の旋律がそれぞれ用いられていることが明記されている。

そして、セカンドアルバムの《JOURNEY AROUND THE BLUE MARBLE》に収録される〈今も好きだから〜時は流れて〉（作詞：阿久悠、作曲／編曲：千住明）はポピュラー音楽の歌曲としては演奏時間が 6 分 46 秒と異例に長く、その歌唱におけるヴィブラートは J-Pop というよりむしろ歌謡曲・演歌を思わせるものがある。それから、PV は ESCOLTA のメンバーが歌う様子とその歌詞の意図に沿った出演者たちの動きや表情を巧みにとらえた映像で構成されており、楽曲の意図を遺憾無く表現していると言えるだろう。また、J-Pop の音楽制作手法が ESCOLTA の音楽に深く関与していることは彼らのレコーディング、録音制作現場の様子を収録した附録の DVD から垣間見ることができる。そこにはプロデューサーと思しき人物がメンバ

一人一人の歌の収録に際して、歌唱法を一字一句細かくチェックし、指示している様子が見える。

それから、ESCOLTA の後続のグループには The JADE、クリスターレ☆がいる¹¹。前者は HIROSHI、JIRO、TETSUYA、HIROYUKI の4人のメンバーのオペラ界のトップ・スターによるユニットとして人気を博している（2009年デビュー）。後者は二期会からオーディションで選ばれ2010年にデビューした女声4人によるソプラノ・ヴォーカル・ユニットで、前者の妹ユニットと称され、小沢祐美子・辛島小恵・鷺尾麻衣・平田由希のオペラ、ミュージカルなどでも活躍するメンバーでオリジナル曲からポップスなどのスタンダード・ナンバー、ヒーリングミュージックまでをレパートリーとして「クラシカルクロスオーバーな世界」（この言い回しはクリスタルのHPによる。）を繰り広げている。

また、ユニットではないが、クラシックの世界からミュージカルに進出し、活躍している近年の注目される逸材の一人に井上芳雄（1979年生まれ）がいる。井上は東京芸術大学音楽学部声楽科に在学中からミュージカル世界にデビューを果たし、卒業後はミュージカル、映画、演劇の分野で様々な作品に主演、出演している¹²。

このように様々な人と物の動きによって、活況を呈しているもう1つのジャンルにミュージカルがある。中でも創作ミュージカルの世界にはJ-Popとの接点、両者の新しい関係性、すなわちクロスオーバーあるいはコラボレーション、トランスバウンダリー、ボーダーレスと目される興味深い現象、事象が見られるので、次にそれを見ていこう。

3 ミュージカルとJ-Pop—J-MUSICALの誕生へ？

まず、日本で単にミュージカルといえば、多くの人がブロードウェイで生み出された数々の名作を日本語で上演する演目を思い浮かべるであろう。確かに、その新作を含めてそういう類の公演も継続的に行われているが、一方でブロードウェイほか海外のミュージカルを日本語で上演するいわゆる翻訳物とは一線を画する、脚本、音楽とも日本製という創作ミュージカルの演目も出現しており、J-Popとの接点はそうした創作ミュージカルに多く見出すことができる。

そして、それとJ-Popの関係は前記の2つのケースと同質と即断することはできないものの、そこから看取される諸事象はコラボレーションからクロスオーバーへ展開する可能性や日本独自のミュージカルの形成、それを将来J-Musicalと呼ぶ日が来るか否かという可能性を含めて今後も継続的に観察、分析していく必要があることを以下に取り上げる事例を通して確認していく。

それから、舞台および映像芸術とJ-Popの接点、関係性を論じるに当たって見落としてはならないのがコミック・アニメの重要性である。それは創作ミュージカルの世界だけに止まらず、映像（映画・テレビ）の世界においても同様に、「テニスの王子様」¹³ほかコミック・アニメ作品を原作とするミュージカル作品が数多く存在しており、今回はそうした作品の中からロックミュージカル「ブリーチ」とミュージカル「黒執事」を取り上げる。

(1) ロックミュージカル《BLEACH ブリーチ 再炎》

原作の『BLEACH』（ブリーチ）とは久保帯人による少年漫画で、それを原作としたアニメ作品（テレビおよび映画版）やゲーム作品も作られている。そして、それを元に制作されたのが一連のロックミュージカル《ブリーチ》¹⁴で、すでに下記のような演目が制作、上演および上演が予定されている。

(1)ロックミュージカル《BLEACH》

東京公演：全労済ホール スペース・ゼロ（2005年8月17日～28日）

(2)ロックミュージカル《BLEACH 再炎》

大阪公演：大阪メルパルクホール（2006年1月5日～8日）

東京公演：日本青年館大ホール（2006年1月14日～19日）

(3)ROCK MUSICAL BLEACH 《The Dark of The Bleeding Moon》

大阪公演：大阪メルパルクホール（2006年8月10日～13日）

東京公演：日本青年館大ホール（2006年8月16日～21日）

(4)ROCK MUSICAL BLEACH 《the LIVE“卍解 SHOW”code:001》

東京公演：青山劇場（2007年1月10日～2007年1月14日）

(5)ROCK MUSICAL BLEACH 《No Clouds in the Blue Heavens》

東京公演：日本青年館大ホール（2007年3月21日～27日）

兵庫公演：兵庫県立芸術文化センター（2007年4月3日～8日）

(6)ROCK MUSICAL BLEACH DX

東京公演：新宿コマ劇場

a. ROCK MUSICAL BLEACH THE ALL（2008年3月24日～26日、30日）

b. the LIVE “卍解 SHOW”code:002（2008年3月27日～29日、31日）

(7)ROCK MUSICAL BLEACH 《DX》 ROCK MUSICAL BLEACH 《the Film Fes-始動!-》

東京公演：九段会館（2009年5月16日～17日）

大阪公演：クレオ大阪中央（2009年8月15日）

(8)ROCK MUSICAL BLEACH 《the LIVE“卍解 SHOW”code:003》

福岡公演：ももち文化センター大ホール（2010年1月15日～17日）

大阪公演：イオン化粧品シアターBRAVA!（2010年1月20日～25日）

東京公演：日本青年館大ホール（2010年1月29日～2月8日）

(9)BLEACH 連載 10 周年記念公演《ROCK MUSICAL BLEACH》

東京公演：シアタークリエ（2011年8月予定）

ロックミュージカル《BLEACH ブリーチ 再炎》のストーリーは次の通りである（同 DVD より引用）。「死神と名のる少女、朽木ルキアが追ってきた悪しき魂、虚（ホロウ）から家族を護

るため、胸に斬魄刀（ザンパクトウ）を突き刺しルキアの死神の能力を得る黒崎一護。それから彼の死神代行としての生活が始まる。だが、死神の能力の譲渡は禁忌。死神が住む世界、尸魂界（ソウル・ソサエティ）より現れた死神六番隊長・朽木白哉と副隊長・阿散井恋次によってルキアは連れ戻される。ルキアに待つのは、殛刑。ルキアを救いたい一護は織姫、茶渡たちと共に尸魂界へと向かう。待ち受けるのは、つわものたちが集う護廷十三隊の隊長、副隊長たち。今、二つの世界を巻き込んだ壮大な戦いが始まった……。」

ロックミュージカル《BLEACH 再炎》の歌曲は玉麻尚一作曲、うへのけいこ作詞によって書かれたもので、以下の曲目を含んでいる（同DVDの解説書から引用）。

第一幕-M01「OVERTURE-BLEACH」M02「あいつを……」M03「あいつを……～大切なこと」M04「浦原商店」M05「小さな安らぎ」M06「聞こえるか」M07「もう一つの地上」M08「何……」

第二幕-M09「流魂街の記憶」M10「うごめく意志」M11「真実の行方」M12「眠れぬ夜」M13「掟 そして迷い」M14「BLEACH」M15「藍染の死」M16「戦いに必要なもの」M17「流魂街の記憶」M18「終わらない戦い」M19「カーテンコール（バウ）」M20「DEATH SONG」M21「変わらない気持ち」M22「Song for you」M23「Silent wish」M24「ハレルヤ・グッバイ」

冒頭のM01〈プロローグ～OVERTURE BLEACH〉は伊坂達也演じる主役の黒崎一護ほか主要キャストが登場し、歌を披露する場面で、DVDでは伴奏バンドが舞台の右上方に位置している様子も収録されており、ギター、ベース、ドラム、キーボードの編成で解説書には担当ミュージシャンがギター演奏：古池孝浩、キーボード：大隅一菜、バンドスタッフ：紙谷礼治と記されている。

M04〈浦原商店〉は死神相手に様々な商売をしている人物、浦原喜助（歌手：伊藤陽佑）によって歌われるもので、歌と語りの中間のような、レチタティーヴォ風の歌が聞かれる。それに対して、朽木ルキア（歌手：佐藤美貴）の歌うM05〈小さな安らぎ〉はJ・Popのバラードソングという印象を受け、いわばアリア風の歌となっている。そして、本編終了後、M20-24の歌によってライブが行われているが、このように本編上演に付加する形としてではなく、上記の上演記録および上演予定の(4)(6)b.(7)(8)のように単独で本格的なライブショーやフィルムフェスタも行っており、それらを収録したCDも出ている。

ロックミュージカル《BLEACH 再炎》の収録曲には翻訳物のミュージカルに往々にしてありがちな、メロディーと歌詞のギクシャクした関係が感じられず、全編を通してすべての歌詞がよく聞き取れるように書かれている。音域の狭い旋法的なメロディーやレチタティーヴォ風に作られた歌だけでなく、いわゆるアリア風のメロディアスな曲においても歌詞の聞き取りに問題が生じることはないだろう。中心的なキャストたちはいわゆる演劇（ストレートプレイ）の舞台俳優、映画俳優、テレビではヒーローものを演じていた人たちで、ミュージカルを専門あるいは経常的に関与している訳ではないという状況¹⁵から察するに、その作風は作曲家がそうした状況に配慮、工夫した結果と思われるが、その詳細については作曲者の音楽的バックグラウンドとともに他日

の調査を期するしかない。

(2) ミュージカル《黒執事—The Most Beautiful DEATH in The World 千の魂と墜ちた死神》

このミュージカルは東京（2010年5月3日～9日、赤坂ACTシアター）、愛知（5月15日～16日、春日井市民会館）、大阪（5月21日～23日、イオン化粧品シアターBARAVA!）で公演が行われ、2010年10月27日に同公演のDVDが発売された新しい演目である。その公演プログラム冊子から原作およびミュージカルのストーリーについての簡単にまとめると以下のようになる。

*『黒執事』（原作：枢やな）とは2006年10月号より月刊「Gファンタジー」（スクウェア・エニックス刊）連載中の人気漫画、現在単行本8巻が発売。

*MBS/TBS系で2008年10月より2009年3月までTVアニメが放送され、TVアニメ版DVDも大ヒットを記録し、2010年7月よりTVアニメ「黒執事II」の放送が決定。

*2009年5月には初の舞台化として《音楽舞踏会「黒執事」—その執事、友好—》を池袋サンシャイン劇場にて上演。連日満席の公演となり、1万人以上を動員して成功を収める。そして2010年5月、新たなキャストを迎え、豪華スタッフ陣により、新作公演「ミュージカル黒執事—The Most Beautiful DEATH in The World 千の魂と墜ちた死神」が催された。

ストーリーは以下の通りである（公演プログラム冊子から引用）。「19世紀、英国。ヴィクトリア女王の「裏」の仕事をお願いする“悪の貴族”ファントムハイヴ家の万能執事・セバスチャン。その正体は悪魔。呪われし運命に立ち向かう孤高の若き当主シエルとの契約のもと、シエルの影となり裏社会の事件を闇で片付けている。ある日、二人は女王の命により、ロンドンで頻発する無差別殺人事件の捜査に乗り出す。一方、“魂を回収する仕事”を担う死神派遣協会では“回収されない魂”の異常発生が問題になっていた。死神ウィリアムはさぼってばかりの同僚のグレルに頭を痛めつつ、優等生死神アランとその相棒エリックに調査を命じる。悪魔、死神、不治の病、呪われた過去。事件はそれぞれの運命と絡みながら、哀しい事実を浮き彫りにしていく。そんな中、ドルイット子爵が開催する一大オペラ公演の幕があげようとしていた。死神に死は訪れるのか？ 何故魂は回収されないのか？ 哀しく切ない調べとともに黒き執事が暗躍するノワール・ファンタジー。」

前述のとおり、これに先立って音楽舞踏会《黒執事》が公開されており、オリジナル劇中歌は作曲：和田俊輔、作詞：浅沼晋太郎で、DVDも発売されている（参考映像参照）。そして、今回はミュージカルと明記しての上演で、これはゲキシネとして9月4日の新宿バルト9を皮切りに全国で公開上映されている¹⁶。

その音楽制作スタッフおよび出演者について公演プログラムを参考にまとめると次のようになる。音楽関係の制作スタッフは森雪之丞（作詞・作詞プロデュース）、岩崎琢（音楽）で、森雪之丞はアニメ主題歌の作詞（ドラゴンボールZ、キン肉マン）、布袋寅泰、氷室京介に詞を提供。近年は舞台、ミュージカルの世界に進出。劇団☆新感線による『五右衛門ロック』などの作

詞を手掛けている。岩崎琢は東京芸術大学音楽学部作曲科卒業。佐藤真、青島広志に師事。1989年日本現代音楽家協会作曲コンクール新人賞入選の経歴を持つ。出演者のほとんどは、やはり舞台を中心に活躍する俳優たちで、主要登場人物の中にはミュージカルを専門とする俳優は見られないが、劇中では多くのキャストが歌とダンスを披露している。その中でプロのミュージシャンと言えるのは以下の二人である。

主演の執事役の松下優也は1990年生まれ。2008年11月26日、シングル「foolish foolish」でデビューし、2010年2月、4thシングル「Trust Me」でオリコンウィークリーチャート10位を記録している。2009年、舞台「音楽舞踏会『黒執事』」では主役を務め、2010年には初の主演映画「ヒカリ、その先へ」も公開され、俳優としても活躍の場を広げている¹⁷。

次に収録歌曲を〈〉で曲名、歌唱の表記は役名と（）内に俳優名を示す。

M01 〈契約〉 歌唱：セバスチャン（松下優也）

M02 〈死神派遣協会のテーマ〉 歌唱：ロナルド（ヨウスケ・クロフォード）、ウィル（永岡卓也）、グレル（植原卓也）ほか 死神全員

M03 〈愛は血まみれ〉 歌唱：セバスチャン（松下優也）

M04 〈Black and White〉 歌唱：セバスチャン（松下優也）、シエル（西井幸人）

M05 〈死の棘〉 歌唱：役名無し（春木里奈）

M06 〈生と死の隙間〜アランのテーマ〉 歌唱：アラン（松本慎也）

M07 〈R指定《グレルの夜這い》〉 歌唱：グレル（植原卓也）

M08 〈ドルイットの自分讃歌〉 歌唱：ドルイット（藤田玲）

M09 〈花言葉は“孤独”〜エリックのテーマ〉 歌唱：エリック（佐伯太輔）

M10 〈チェックメイト〉 歌唱：セバスチャン（松下優也）、シエル（西井幸人）、ドルイット（藤田玲）、エリック（松本慎也）、ウィル（永岡卓也）、ロナルド（ヨウスケ・クロフォード）、アパーライン（伊勢直弘）、ハンクス（青木隆敏）、バルド（岩崎大）、フィニ（南翔太）&メイリン（猪狩敦子）

M11 〈千の魂と堕ちた死神〉 歌唱：セバスチャン（松下優也）

M12 〈運命〜アランとエリックのテーマ〉 歌唱：エリック（佐伯太輔）、アラン（松本慎也）

M13 〈Hallucination〉 歌唱：セバスチャン（松下優也）

M14 〈生執事のテーマ〉

中でも興味深い1曲は〈愛は血まみれ〉である。これはロンドンで葬儀屋を営む謎の人物で、趣味は検死解剖で、遺体の情報を金ではなく“笑い”と引き換えに提供する変人の要求に応じてセバスチャンが、「ファントムハヴ家の執事たるもの、愛の一つや二つ用意できずにどうします？」という決め台詞の後に歌うものである。下記の歌詞を一瞥しただけでも、J-Popのそれとは異なる世界が示されていることが想像されるが、実際、歌唱スタイルはヴィブラートの多用によって演歌・歌謡曲の世界を再現し、不思議な音世界を展開している。

〈愛は血マミレ〉

「好きやねん」って囁いた 手に汗を握り 「アホやな」って叩かれ 愛は血マミレ
男のオイラに ここまで言わせて それでええのか? おまえ悪魔や.... 泣けばロンドン 霧にむせぶ夜
「好きやねん」って叫んでた 胸を掻き毟り 「クドいわ」って蹴られて愛は絶命
スコッチ酒場の縄暖簾くぐり 酔いしれるたび おまえ恋しい.... 馬車を走らせ
霧で事故る夜 霧にむせぶ夜 霧に迷う夜 霧が晴れぬ夜 キリがないやめた

もう一人注目されるのがオペラ歌手役の春木里奈で、彼女の経歴についての詳細は不明だがオペラやミュージカルに出演しているようである。公演プログラムのプロフィール紹介によると「歌手・舞台女優。カーネギーホール、ジョン・F・ケネディ舞台芸術センター、マーキン・コンサートホールなどの国際的ホールでのソロイストとしてのコンサート、主演でのオペラ公演。イタリアの音楽祭、アッシジ・ミュージックフェスティバルのソロでのコンサートツアー、ニューヨークではミュージカル、芝居、映画にも多く出演。」とあり、そして、在米日系の情報誌『よみタイム』(Vol.113、2009年5月15日発行号)のネット上の記事¹⁸には「若いタレント紹介の慈善公演ハーモニヤ・オペラ 29日に」と題する記事が掲載されており、「米国唯一の日本のオペラカンパニーであるハーモニヤ・オペラ・カンパニー(81年創立、主宰・飯沼恵美子=08年度外務大臣賞受賞)は、春のベネフィット・コンサートを5月29日(金)午後8時からリンカーン・センター近くの教会で開催する。(中略)・・・主役には、新人のソプラノ歌手、春木里奈を抜てき(以下略)・・・」と書かれている。

その春木の歌う〈死の棘〉は、死神の天敵、悪魔から死の棘を刺されてしまった死神アランの状況を歌うもので、ベルカントによる歌唱であるにもかかわらず、オリジナル作品であるせいか歌詞がよく聞き取れる。

〈死の棘〉

甘き“死の棘”の密 朽ちることなき死神の魂 眠らせたまえ
清き“死の棘”の毒 安らぎのない 永遠の魂 葬りたまえ
擦れ去る時間が 刻む無数の傷 生きることが拷問なら 何を暴く?
甘き“死の棘”の密 朽ちることなき死神の魂 眠らせたまえ

また、春木はドルイット子爵の主催するオペラ鑑賞会の場面において、オッフエンバックのオペラ《ホフマン物語》の〈人形の歌〉で見事な歌声を披露している。

その他、エンディングテーマ〈Hallucination〉(作詞:森雪之丞、作曲:Jin Nakamura)は松下優也のシングルCDとして発売されており、J-Popの世界に進出している。このようにJ-Pop、ミュージカルの大御所的作詞家とクラシック界出身の若手作曲家が楽曲を書き上げ、J-Popのミュージシャンが主役を務め、舞台俳優たちが歌い踊り、クラシック・ミュージカルで活躍するソ

プラノ歌手も参与するといったユニークなメンバー構成により多様な音楽世界が展開されている。そのように考えると、《黒執事—The Most Beautiful DEATH in The World 千の魂と墜ちた死神》はトランスバウンダリーあるいはハイブリッド様式のミュージカルと言えるかも知れない。

4 まとめと今後の課題

これまで、J-Pop と他ジャンルの音楽と演劇間に見られるクロスオーバー現象とそれに纏わる事象を伝統邦楽、クラシック、ミュージカルにおける事例を通してその具体的な状況を見てきたが、それは以下のようにまとめることができるだろう。

(1)伝統邦楽においても ZAN のように J-Pop とのクロスオーバーという意識が明確に感じられるミュージシャンが出現しつつあるが、その音楽スタイルの方向を打ち出すまでには至っていないと思われる。ただ、伝統邦楽にも新しい方向性を目指す動きは見られ、今後注視していく必要がある。

(2)クラシックとポピュラー音楽は以前から様々な関わりを持っていたが、今日ではクラシカル・クロスオーバーというジャンル名が定着しており、特に J-Pop との関係性において商業戦略としてターゲットを定めてマーケットを意識して作られている。さらに、クラシック出身の音楽家は一部のクラシカル・クロスオーバーに関わりをもつものを含めて続々とミュージカルに進出している。

(3)創作ミュージカルに多彩な音楽スタイルを示した演目が生み出されており、それらを即クロスオーバー現象ととらえて良いかどうかは、さらに検証が必要であるが、創作ミュージカルの活況に伴い、J-pop ミュージシャンのミュージカルへの進出、演劇人がミュージカル、さらに J-pop に積極的に関与し始めていることが注目される。

実際、舞台芸術の分野では、ロックとミュージカルが融合したロックミュージカルダンスとミュージカルが融合したダンスミュージカルといったものが定着していることは多くの演目の存在から確認することができる。さらに、ミュージカルと銘打ってはいないが、音楽が重視されている演目や、歌謡曲や J-Pop の既製の楽曲を使用して構成する演目もある。

こうして、音楽・舞踊がかなりの程度、普通に挿入される演目の増加により、演劇人が今まで以上に音楽・舞踊に関わるようになってきていることはクロスオーバーという視点からも注目される動きとしてとらえられるだろう。近年では、演劇界から音楽界 (J-Pop) への「参入」とも考えられそうな現象として、+Plus、COCOA 男。ほかインディーズからメジャーデビューへ進む例も珍しくなくなった。

最後に器楽の例に少し言及しておこう。器楽は J-Pop という限られた枠組みからではなく、広く音楽のクロスオーバーという視点からとらえるべきミュージシャンを多く輩出している。ピアニストで一般に知られているところでは、兄弟ピアノ・デュオのル・フレール、近年クラシックや舞台の音楽制作にも進出しているジャズピアニストの小曾根真のほか、映画、舞台音楽を多く手がけている稲本響らがいる。ヴァイオリンとその他のデュオ、アンサンブルではヴァイオリン

とピアノのデュオの杉ちゃん&鉄平のヴァイオリニスト岡田鉄平（桐朋学園大学大学院研究科修了）は長岡京アンサンブルにも在籍している。2本のヴァイオリンとピアノのトリオ、TSUKEMENはTAIRIKU（ヴァイオリン、桐朋学園大学大学院修了）、SUGURU（ピアノ、桐朋学園大学卒）、KENTA（ヴァイオリン、東京音楽大学卒）のメンバーで構成されている。最も新しいところではビートルズの楽曲を2本のヴァイオリンとチェロ、ピアノ編成でフィーチャーしCDデビューした1966カルテットは松浦梨沙（ヴァイオリン、京都市立芸大卒）、花井悠希（ヴァイオリン、東京音大在学中）、林はるか（チェロ、東京芸大大学院在学中）、長篠央子（ピアノ、東京芸大大学院修了）のメンバーで、同CD収録曲のアレンジは加藤真一郎（桐朋学園大学大学院研究科[作曲専攻]修了）が担当している。その他、ESCOLTAの最新CDではコンポーザー・ピアニストの天平ほか数々の器楽、声楽のミュージシャンとコラボを行っており、これがどういう現象を生み出すか興味は尽きない。

注

1. 本科目の開設は東京芸大に遅れること40年近くになり、しかも音響映像の使用がままならない教室での講義を余儀なくされているというカリキュラムおよび機器設備双方に象徴される本学の教育環境の後進性に今更のように思い知らされている。
2. みやざきみえこ HP→http://www.geocities.jp/miyazaki_mieko/。藤原道山 HP→<http://www.dozan.jp/> 同CD附録のチラシには「尺八でここまで西洋音楽を吹けるものかと、まずそのテクニックに驚いてしまう」という坂本龍一のコメントが書かれている。
3. 古武道 HP→<http://columbia.jp/kobudo/>
4. ZANHP→<http://www.rhythmzone.net/zan/index.html>
5. YOU TUBE では彼らの全国各地で行ったライブやテレビ出演の映像がアップされている。
6. 上妻宏光 HP→<http://agatsuma.tv/>
7. 芸団協 HP→<http://www.geidankyo.or.jp/top.shtml>
8. ESCOLTA の HP→<http://www.escolta.jp/>
9. 山崎はミュージカル「モーツァルト」ほか、田代は「マルグリット」ほかで主演を務め、ともに好評を博している。
10. <http://www.ritsumei.ac.jp/acd/cg/ss/07jasrac/kouki/4/kouki4.htm> JASRAC 寄附講座 音楽・文化産業論Ⅱ「音楽マーケティングの過去・現在・未来—ヒットの法則はあるのか？」
11. The JADEHP→<http://thejade.jp/>。メンバーの一人JIROH こと高野二郎氏は愛知県立芸術大学非常勤講師を務めている。クリスターレ☆HP→<http://cristalle.jp/>
12. 井上芳雄 HP→<http://www.grand-arts.com/yi/>
13. ミュージカル「テニスの王子様」HP→<http://www.tennimu.com/>
14. ロックミュージカル「ブリーチ」HP→<http://pierrot.jp/title/bleach/musical/>
15. 主要出演者のうち森山栄治、永山たかし、大口兼悟、土屋裕一は創作ミュージカル「テニスの王子様」に出演経歴

があるがミュージカル専門の俳優ではない。

16. ミュージカル「黒執事」HP→<http://www.kuroshitsuji-stage.jp/>
17. 松下優也 HP→<http://www.matsushitayuya.com/>
18. 「よみタイム」HP→<http://www.yomitime.com/051509/0901.html>

参考音源・映像

- 《乱》ZAVCD-0002、Cream of the crop、2003年
- 《EXILE real world》RZCD-45135、Avex Inc.、2004年
- 《ZAN 風籟・Furai》RZCD-45130、Avex Inc.、2004年
- 《ZAN 昴》RZCD-45165、Avex Inc.、2005年
- 《ロックミュージカル BLEACH 再炎》RMBD-0602、株式会社ぴえろ、2006年
- 《絆 ZAN》RZCD-45499/B、AVEX ENTERTAINMENT INC.、2007年
- 《愛の流星群》VICC-60600、ビクターエンタテインメント株式会社、2007年11月14日
- 《JOURNEY AROUND THE BLUE MARBLE》VIZC-13、ビクターエンタテインメント株式会社、2008年
- 《ZAN Neo Tokyo Lounge》RZCD-46300、AVEX ENTERTAINMENT INC.、2009年
- 《音楽舞踏会黒執事 その執事、友好》ANSB5533、ANIPLEX、2009年
- 《～エスコルタ プートレグ映像集～ECCOLTV+ASCOLTA》VIZC-18、ビクターエンタテインメント株式会社、2010年
- 《YOU/Hallucination》ESCL-3437、Epic Records Japan Inc.、2010年
- 《ミュージカル黒執事-The Most Beautiful DEATH in The World 千の魂と墜ちた死神》ANSB5561-2、ANIPLEX、2010年

参考文献

- 佐藤良明『J-POP 進化論「ヨサホイ節」から「Automatic」へ』平凡社新書008、1999年
- 鳥賀陽弘道『J ポップとは何かー巨大化する音楽産業ー』岩波新書945、2005年
- 社団法人日本芸能実演家団体協議会編『走向全球ー当代日本伝統表演芸術展演（上海万博用プログラム）』社団法人日本芸能実演家団体協議会、2010年
- 高倉文紀「松下優也NEXT BREAKERS ブレイク間近の実力派男性シンガー」『日経エンタテインメント12月号、No.165』p.11、日経BP社、2010年
- 『ミュージカル黒執事-The Most Beautiful DEATH in The World 千の魂と墜ちた死神』（公演パンフレット）ミュージカル黒執事制作委員会、2010年